

表紙

再板  
改正

女今川  
教文



見返し

女今川おしへ文



女教訓誦書本目錄  
 女大學宝箱  
 女小學教草  
 女蒙求艷詞  
 婦人教訓書  
 女今川教文  
 女訓身持鑑  
 女教訓鑽袋  
 女用玉手箱  
 女七宝操庫  
 女教補鑽袋  
 女學則



女庭訓所文庫  
 女堪忍記倭文  
 女中庸瑪瑙箱  
 女五常訓大和織  
 女朗詠教訓歌  
 女用智惠鑑錦織  
 女要新珠文庫  
 女學則



〔目録〕  
 ○女教訓誦書本目錄

- 女大學宝箱
- 女小學教草
- 女蒙求艷詞
- 婦人教訓書
- 女今川教文
- 女訓身持鑑
- 女教訓鑽袋
- 女用玉手箱
- 女七宝操庫
- 女教補鑽袋
- 女學則

- 女庭訓御所文庫
- 女堪忍記倭文
- 女中庸瑪瑙箱
- 女五常訓大和織
- 女朗詠教訓歌
- 女用智惠鑑錦織
- 女要新珠文庫

此(註)どく書本目錄は人の娘たらんもの、いとけなくて手習(伊勢)けいこのひまもあらば、百人一首いせ物語などの文につづきて、此目錄にあるの文をよませ玉ふべし。女はぐちにおろかなれば、此文をよませてよき方へ導引(みちびき)の便(たより)となす。



官女

腰元

かきつむる藻くさをいかが  
 思ふらん 浪になれたる和  
 歌のうら人  
 春かけて葉さき色づく若楓  
 さもあらましを何いそぐら  
 ん

武家

町娘

春日山かすめる空に千早振  
 神のひかりはのどけからま  
 し  
 ほのぼのと花のよこ雲明そ  
 めて さくらにしらむみよ  
 しのの山

百姓

町の室

たをやめの袖打はらふ村雨  
 に 取るや早苗の植もなら  
 はず  
 八雲たつ出雲八重垣妻ごめ  
 に 八重垣つくるその八重  
 垣を

尼

湯女

千代能がいただく桶のそこ  
 ぬけて 水たまらねば月も  
 やどらず  
 有間山君が御幸もとしふり  
 ぬ たのむしるしを神もあ  
 らわせ



神職

君待て二度<sup>ふたたび</sup>すめる川水に  
千世そふ春の御禊をぞせし

職人

秋さむきねやの扇の風たへ<sup>を</sup>  
て 雲のおりめの月ぞかく  
るる

海女

白浪のよするなぎさに世を  
すごす あまの子なれば宿  
も定めず

傾城

我恋はみもののお山の一つ松  
結し心いまもわすれず

御家御門弟

女今川

今川になぞらへて女をいま  
しむ制詞の條々  
一常<sup>つね</sup>の心ざし無嗜<sup>ぶたしなみ</sup>

御家御門弟  
女今川  
今川になぞらへて女をいま  
しむ制詞の條々  
一常の心ざし無嗜

七草の文

正月七日を五節句の始とす。此日を人日ともいひて、上御一人より下万民に至るまで、芹(御形)五行なづなはこべら仏の坐すずなすしろといふ七種の草を粥に煮て食する事故実なり。是を食すれば万病を除き邪気を払といへり。今も民家に若菜をかゆに入て食し、これをふわかしといふ。此いわれ、正月は一年の初にして、ふるきをさり新を向ふ時なれば、貴賤上下おしなべてかくはいわひたわむれ、さまざまの遊びをなしてもことわり也。

にして女乃道不みちの明事あきらかなら

一若わかき女の無益むやくのみや寺(宮)へ参まゐりたのしむ事

一小事せうじをも愚をろかにして考かんがな

く何かと誹ひぼう謗ぼうする事

一大事だいじをも弁わきまなく我わがこ

ろ打



七草の文  
正月七日を五節句の始とす。此日を人日ともいひて、上御一人より下万民に至るまで、芹五行なづなはこべら仏の坐すずなすしろといふ七種の草を粥に煮て食する事故実なり。是を食すれば万病を除き邪気を払といへり。今も民家に若菜をかゆに入て食し、これをふわかしといふ。此いわれ、正月は一年の初にして、ふるきをさり新を向ふ時なれば、貴賤上下おしなべてかくはいわひたわむれ、さまざまの遊びをなしてもことわり也。

水乃道不みちの明事あきらかなら  
一若わかき女の無益むやくのみや寺(宮)へ参まゐりたのしむ事  
一小事せうじをも愚をろかにして考かんがな  
く何かと誹ひぼう謗ぼうする事  
一大事だいじをも弁わきまなく我わがこ  
ろ打







○伊勢の御  
 前大和守從五位上藤原の繼陰が娘なり。後撰集に伊勢の御息所とあるゆへは、寛平法皇に近く宮仕へして行明親王を生めり。ゆへに(伊勢)の女御ともいふ。在五中將業平一年いせへ下りし時に、故ありて此いせの御と御別れの歌をば盃の内に女御より「かち人の渡せどぬれぬ縁にしあれば、といふ上の句をかきて送られければ、」また相ふ坂の関は越なん、といふ下の句を業平より送られける。是歌かるたの初なり。此歌は新古今より出る十五首の内なり。同年迄凡九百四十一年になる。



三月二日(陰)上巳といふ。唐土の世より初蓬を用て草の餅を作る。昔は鼠麴草にて作り、先祖を祭りしともいへり。此餅を食すれば百病を除ゆへ也。此日童女のたわむれにひいな遊として、少き人形翫事有。雜遊の事は源氏物語に見へ侍れば、いにしへより有し事にや。又源氏に十にあまりぬる人はひいな遊はいみはべるものとあれば、十歳より中にする事ならんか。此もて遊びに裁縫食事の器物を専らとする事、みな女子のしよくぶんなれば、いとけなき時よりもこれらを手なれさせんとはいわれなるべし。

新古今集 第十一恋歌の一  
 源のまも あはでこのよを  
 すぐしてよとや  
 伊勢の御  
 前大和守從五位上藤原の繼陰が娘なり。後撰集に伊勢の御息所とあるゆへは、寛平法皇に近く宮仕へして行明親王を生めり。ゆへに(伊勢)の女御ともいふ。在五中將業平一年いせへ下りし時に、故ありて此いせの御と御別れの歌をば盃の内に女御より「かち人の渡せどぬれぬ縁にしあれば、といふ上の句をかきて送られければ、」また相ふ坂の関は越なん、といふ下の句を業平より送られける。是歌かるたの初なり。此歌は新古今より出る十五首の内なり。同年迄凡九百四十一年になる。

新古今集 第十一恋歌の一  
 難波がたみじかきあしのふ  
 しのまも あはでこのよを  
 すぐしてよとや

事  
 驕に長じて道をおそれざる  
 一道にそむきて榮るものを  
 うらやみ願ふ事



七月七日と星合といふ。斎諧記といふ文に、天上にて牽牛織女の二星もとほ夫婦たる故、今夜は天の川を渡り相あふといへり。我國の神道には織女を田機姫、牽牛を田機彦ともいへり。是和漢とも祭る儀式あり。これを乞巧奠といひ、俗には七夕祭りといふなり。近代手跡指南を家業とする家々に七夕祭り有。いづれも童男女をあつめて音楽をもふけ、めい／＼うつくしきゆかた帷子を着て踊り遊ぶこと、此故事によると知るべし。

浦のひまわり  
 人をさうゆり  
 八世申言をきて  
 人の熱をひく  
 身さだのひま

○右近  
 右近の少将藤原季繩の娘なり。此季繩後に交野の少将と号すれども、娘右近の少将なる故に、右近と名付たり。此歌拾遺集には題しらずとあれども、大和物語には、男のわすれじと万の叟をかけてちかひけれども、忘れにける後にいいやりけるとあり。  
 身を捨て人の命をおしめども  
 有しちかひのおぼ多やはせん  
 此歌の心にて聞へたり。是は定家の歌なり。拾遺集より撰び出す所の十一首の内なり。  
 明和三年迄凡六百六年になる。



○右近

右近の少将藤原季繩の娘なり。此季繩後に交野の少将と号すれども、娘右近の少将なる故に、右近と名付たり。此歌拾遺集には題しらずとあれども、大和物語には、男のわすれじと万の叟をかけてちかひけれども、忘れにける後にいいやりけるとあり。  
 身を捨て人の命をおしめども  
 有しちかひのおぼ多やはせん  
 此歌の心にて聞へたり。是は定家の歌なり。拾遺集より撰び出す所の十一首の内なり。

拾遺集 第十四恋歌の四

まよひ万事につき人をそしる事  
 一人の中言を企て人の愁を以て我身をたのしむ叟

わすらるる身をば思はず  
 ちかひてし 人のいのち  
 のおしくもある哉

○右大將の徳母  
 友原倫寧女を東三條入道白兼家の  
 蜻蛉日記といへる文の作者た  
 りしが、拾遺集に詞書をして此歌あり。  
 其詞事に入道撰政ある時まかりたる門  
 をおそくあけたりければ、外に立わづ  
 ろふと云入て侍りければ、かかるうた  
 をはやくもよみていだせる事、奇妙の  
 わざなり。和歌の達人はいふもくだし  
 けれども、此人本朝古今の美人抄三人  
 の内なりとぞ。この歌拾遺集十一首の  
 内なり。  
 同年迄七百七十六年に成る。



八朔田面の文  
 八月朔日と田面れを言  
 といふくま方けくかん  
 又くして百姓れを言  
 田面れを言今年の  
 米はもう何れとあ  
 ぞてはりありあか  
 百姓れを言  
 田畑にいてるん  
 役人ぞとさま  
 してりてう  
 のを言といふ  
 を言上とく  
 畑も天下れ泰平  
 まうといふ  
 とのく公なり

一道具衣裳等  
 己暉麗みくしき事  
 一貴も賤も世  
 けふふかき事

○右大將道綱母

藤原倫寧女にて東三條入道関白兼家の  
 妻なり。蜻蛉日記といへる文の作者た  
 りしが、拾遺集に詞書をして此歌あり。  
 其詞事に入道撰政ある時まかりたる門  
 をおそくあけたりければ、外に立わづ  
 ろふと云入て侍りければ、かかるうた  
 をはやくもよみていだせる事、奇妙の  
 わざなり。和歌の達人はいふもくだし  
 けれども、此人本朝古今の美人抄三人  
 の内なりとぞ。この歌拾遺集十一首の  
 内なり。  
 同年迄七百七十六年に成る。

拾遺集 第十四恋の四

歎きつつひとりぬる夜の  
 あくるまは いかにか  
 きものとかはしる

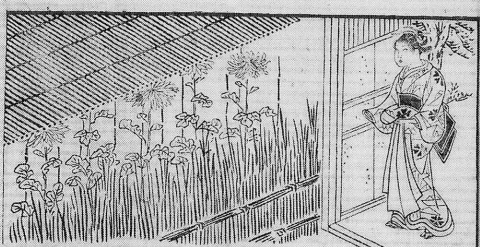
八朔田面の文

八月朔日を田面の節句といふて、在方  
 にてはけん見といふて、百姓の米を田  
 に作りながら、今年の米はみいりが何  
 ほどあるとて、つもりあぐる地頭の役  
 義なればとて、百姓衆中田畑にいでて  
 けん見の役人中をさまざま響応しても  
 てなす。是を田面の節句といふ。しか  
 るに近年は上古とちがひ、田畑も天下  
 の泰平なるにしたがひ、ひろくなるゆ  
 へにものごと公なり。

一道具衣裳等己暉麗にし  
 て召仕見ぐるしき事  
 一貴も賤も世のはかなき  
 事を



九月九日と重陽といふ。世俗に菊の節  
 世俗小菊のさなふころ  
 今日菊酒のめば命をのぶるとい  
 此酒のめば命をのぶるとい  
 のふるといふにやうと云  
 たりつてみては菊は  
 菜葉とふくろへ入升にかけ  
 菊を酒と云ふはひさしは  
 菊の根葉をくふ女仏を愛  
 長房にうけてふくろを  
 とのふくろを女仏を愛  
 又今日栗子飯とくふこと  
 味よりぬくけつを熟して  
 味よりぬくけつを熟して  
 二月三日の如く雛遊と云  
 こも堂上にはかつてなき事



一人の非を見るを以て我  
 知有とおもふ事  
 一家沙門をた  
 不足の事  
 或は驕る事  
 一我分際をしらず或は驕  
 る事

つとむといふ共側近くな  
 る事  
 一我分際をしらず或は驕  
 る事  
 或は不足の事  
 不足の事

九月九日を重陽といふ。世俗に菊の節  
 句といふ。今日菊酒をのむことあり。  
 此酒をのめば邪をさけ命をのぶるとい  
 ふ説によると見へたり。もろこしにて  
 は家々に菜葉をふくろへ入升にかけ、  
 菊花酒を呑。是はむかし汝南の桓景と  
 いふ者仙人費長房にならひて、ふしぎ  
 に災をのがれたる故事よりおこれり。  
 又今日栗子飯をくふことと漢ともにあ  
 り。此時栗熟して味よろしき故也。民  
 家には此日三月三日の如く雛遊をすれ  
 ども、堂上にはかつてなき事。

一人の非を見るを以て我  
 知有とおもふ事  
 一家沙門をた  
 不足の事  
 或は驕る事  
 一我分際をしらず或は驕  
 る事



婦人名色

性	木	火	性	土	性	金	性	水	性
七秀沈蘭常三	茂万民百米房梅色品	吉岩菊園龜茂庫高為	際艶塩久吟花近市度	藤中竹林蝶鳴長盡縫	峯民為重傳京羅里雪	傳次勝歌光琴作常石	千松霜舶改秋崎熊虎	清春善権秋雪庄勝初	松正浅七秀沈蘭常三

一人の善悪を  
わすれぬは  
一舅姑にそまつにして人  
乃そし

○儀同三司の母  
高階成忠の娘にて中ノ関白道隆の室にて儀同三司伊周公中宮定子等の母なり詞書に中の関白通ひそめ侍る比との更なりし歌とかや。此歌の心は幾とせをふるともわすれじとはいへども、世のありさまかわりやすきならひなれば、わすれじとは思ひ給ふべきなれども、後に忘れ給はん。其時にうき思ひをせんよりは、今なさけふかさに、今日をかぎりにして死にたきとの歌の心なり。



新古今集 恋歌の三巻頭

新古今集 恋歌の三巻頭  
一人の善悪をわすれぬは  
一舅姑にそまつにして人乃そし

婦人名色

性	木	火	性	土	性	金	性	水	性
松正浅七秀沈蘭常三	茂万民百米房梅色品	吉岩菊園龜茂庫高為	際艶塩久吟花近市度	藤中竹林蝶鳴長盡縫	峯民為重傳京羅里雪	傳次勝歌光琴作常石	千松霜舶改秋崎熊虎	清春善権秋雪庄勝初	松正浅七秀沈蘭常三

○儀同三司の母

高階成忠の娘にて中ノ関白道隆の室にて、儀同三司伊周公中宮定子等の母なり。詞書に中の関白通ひそめ侍る比との更なりし歌とかや。此歌の心は幾とせをふるともわすれじとはいへども、世のありさまかわりやすきならひなれば、わすれじとは思ひ給ふべきなれども、後に忘れ給はん。其時にうき思ひをせんよりは、今なさけふかさに、今日をかぎりにして死にたきとの歌の心なり。

一人の善悪をわすれぬは  
一舅姑にそまつにして人乃そし

新古今集 恋歌の三巻頭 也

わすれじの行末まではかたけれど けふをかぎりの命ともかな





の教とめをわへてそり  
 とゆあくそりなほを今  
 とるるれけつてあまら  
 あうほくそりへ  
 たしわいそく時読歌  
 る玉振神の教を我ぞする  
 けそりうそりそりうめ  
 朝日さす愛子の宮のおしへなり  
 男のうわき今ぞたちぬる  
 唐国のあしき賊の絹たちて  
 入日も時もきはざりける  
 此歌を三べんづつとなへて、心をよく  
 くしづめてたち物にかかるべし。此  
 外申の日着類をたつ事あしし。

親類縁者といふとも親す  
 一我に勝れるを嫌ひ己に  
 随ものを愛する支  
 一人来る時その客に對し  
 いかりをうつし不礼の事  
 右この條々常に女の道靜  
 女に道靜をす

親類縁者といふとも親す  
 一我に勝れるを嫌ひ己に  
 随ものを愛する支  
 一人来る時その客に對し  
 いかりをうつし不礼の事  
 右この條々常に女の道靜  
 女に道靜をす

の教をあらたむべし。はり(針)をゆめく  
 そまつにすべからず。着類に残りてあ  
 やまちあり。つつしむべし。  
 たち物いそぐ時読歌  
 千早振神の教を我ぞする  
 此宿よりもとみぞふりぬる  
 朝日さす愛子の宮のおしへなり  
 男のうわき(浮氣)今ぞたちぬる  
 唐国のあしき賊の絹(敷)たちて  
 入日も時もきはざりける  
 此歌を三べんづつとなへて、心をよく  
 くしづめてたち物にかかるべし。此  
 外申(外)の日着類(敷)をたつ事あしし。  
 親類縁者といふとも親す  
 ぐる事  
 一我に勝れるを嫌ひ己に  
 随ものを愛する支  
 一人来る時その客に對し  
 いかりをうつし不礼の事  
 右この條々常に女の道靜  
 女に道靜をす

倭言葉

惠命院僧正といへる人つくれり。海士乃藻芥といふ文にくわしく見へ侍れども、ここに畧す。むかし内裏仙洞には諸々の飯ものに美名をつけてめされたもふなるゆへに、当坐にこのことばを聞ては、さしあたりめいわくするものなれば、ここにくわしくするのみ。

- 米を うちまき
- みそを おむし
- 醤油を おひたし

きりくわくか  
をききまじり  
みそを  
おひたし

○和泉式部  
上東門院の女房大江の雅政の娘なり。和泉の守道貞の妻となる。仍て和泉式部と号。小式部を生たり。袋艸子に定頼卿四条大納言にとふて曰、式部赤染いづれかすぐれ候や。泉式部は実を得たる歌よみのさまにこそ侍らざんめれ。口にまかせたる事どもに、かならず目にとまる吏ども読たへ侍りと有。

後拾遺集 第十三恋の三  
あらざらむこのよの外の  
思ひ出に 今一たびのあ  
ふよしもがな

○和泉式部  
上東門院の女房大江の雅政の娘なり。和泉の守道貞の妻となる。仍て和泉式部と号。小式部を生たり。袋艸子に定頼卿四条大納言にとふて曰、式部赤染いづれかすぐれ候や。泉式部は実を得たる歌よみのさまにこそ侍らざんめれ。口にまかせたる事どもに、かならず目にとまる吏ども読たへ侍りと有。



水は水火は元の火にかへしけり  
思ひしことよ失はざればこそ  
此歌後拾遺集より出る十五首の内なり。  
明和三年迄七百七十六年になる。

後拾遺集 第十三恋の三  
あらざらむこのよの外の  
思ひ出に 今一たびのあ  
ふよしもがな



○大貳三位

河海抄小倉の局といふ也。紫式部が娘にて大貳成平が妻となる故に、大貳の三位といふ。後冷泉院の御母の御代にして狭衣物語の作者なり。狭衣は源氏物語と世にならびて人の知れる文なり。かれはなるおとこのおぼつかなくなどいひたりけるによめるとの後拾遺集の詞書なり。



後拾遺集 卷十二

- 香油を かうく
- 甘酒を あまくこん
- 酒を くこん
- ひしほを あまむし
- しんこを しらいと
- だんこを いしく
- すり木を こがらし
- 切ヒを うぐひす
- 紅を おいろ
- ちさを お葉いろ
- 水を おひや
- 剃刀を おもたれ
- 餅を おあし
- 昼食を おちん
- おごご

おとこのおぼつかなくなどいひたりけるによめるとの後拾遺集の詞書なり。

○大貳三位

河海抄に文の局といふ也。紫式部が娘にて大貳成平が妻となる故に、大貳の三位といふ。後冷泉院の御母の御代にして狭衣物語の作者なり。狭衣は源氏物語と世にならびて人の知れる文なり。かれはなるおとこのおぼつかなくなどいひたりけるによめるとの後拾遺集の詞書なり。

- 香油を かうく
- 甘酒を あまくこん
- 酒を くこん
- ひしほを あまむし
- しんこを しらいと
- だんこを いしく
- すり木を こがらし
- 切ヒを うぐひす
- 紅を おいろ
- ちさを お葉いろ
- 水を おひや
- 剃刀を おもたれ
- 餅を おあし
- 昼食を おちん
- おごご

後拾遺集 第十二恋の三  
有馬山いなのおさ原風吹け  
ばいそよ人をわすれや  
わする

家を可守には、第一慈悲深くたたく心懸べし。夫天は陽にしてつよく、地は





- 寝る事を おしつまる
- 起るを おひるなる
- 髪洗を おくしすます
- 握飯を むすび
- ぬかを まちかね
- 升を 四ほう
- こんにやくを にやく
- 引飯を 干もじの粉
- ほし瓜を ほりく
- とふふを おかべ
- きらずを おかべのから
- でんがくを おでん
- ぼた餅を おはぎ
- ごまめを ことのぼら
- のりを のもじ
- 湯のこを おゆのした

陰いんめく和やわらふ  
 志しふく陰いんを  
 陽やうく志しふく  
 干かんもじの粉こな  
 理りがらるるらるるをを夫ふう妻さいぬ  
 のみち天地てんちにたとへたれ  
 とふれまきまの  
 夫ふうの恵めぐみをうけて

- 寝る事を おしつまる
- 起るを おひるなる
- 髪洗を おくしすます
- 握飯を むすび
- ぬかを まちかね
- 升を 四ほう
- こんにやくを にやく
- 引飯を 干もじの粉
- ほし瓜を ほりく
- とふふを おかべ
- きらずを おかべのから
- でんがくを おでん
- ぼた餅を おはぎ
- ごまめを ことのぼら
- のりを のもじ
- 湯のこを おゆのした

陰いんにして和やわらか也。しかる  
 に陰いんは陽やうにしたがふこ  
 と、天地しぜん自然だうりの道理だうりなる  
 故ゆゑに、夫ふう妻さい

のみち(道)天地てんちにたとへたれ  
 ば、夫ふうを天てんのごとくうや  
 まひつゝしむべし。地ちは  
 天てんの恵めぐみをうけて

女妙薬療治手箱庭

○ちのやぶれたるには、なすびのひねたるを焼てさいくぬるべし。また丁子を粉にして水にてのむべし。  
 ○さんご大べんけつするに  
 当帰 川芎 枳殼  
 防風 各一分づつ甘草二分  
 かけ合せんじのむべし。  
 ○さんご小べんに血をするには、ごしつを一味せんじてのむべし。  
 ○さんごらんきするには、きりんけつをこにして壱分づつひや水にてのむべし。

○ちのやぶれたるには、なすびのひねたるを焼てさいくぬるべし。また丁子を粉にして水にてのむべし。  
 ○さんご大べんけつするに  
 当帰 川芎 枳殼  
 防風 各一分づつ甘草二分  
 かけ合せんじのむべし。  
 ○さんご小べんに血をするには、ごしつを一味せんじてのむべし。  
 ○さんごらんきするには、きりんけつをこにして壱分づつひや水にてのむべし。

百物を生るにより、夫を  
 貴むは是皆女の孝行の道  
 也。仁義礼智信の五常い  
 づれも人の行へき

道なれ共、取分守るべき  
 は仁の道也。されば幼時  
 よりやさしき友に交り、  
 仮初にも猥がはし

女妙薬療治手箱庭

○ちのやぶれたるには、なすびのひねたるを焼てさいくぬるべし。また丁子を粉にして水にてのむべし。  
 ○さんご大べんけつするに  
 当帰 川芎 枳殼  
 防風 各一分づつ甘草二分  
 かけ合せんじのむべし。  
 ○さんご小べんに血をするには、ごしつを一味せんじてのむべし。  
 ○さんごらんきするには、きりんけつをこにして壱分づつひや水にてのむべし。

○ちのやぶれたるには、なすびのひねたるを焼てさいくぬるべし。また丁子を粉にして水にてのむべし。  
 ○さんご大べんけつするに  
 当帰 川芎 枳殼  
 防風 各一分づつ甘草二分  
 かけ合せんじのむべし。  
 ○さんご小べんに血をするには、ごしつを一味せんじてのむべし。  
 ○さんごらんきするには、きりんけつをこにして壱分づつひや水にてのむべし。

万物を生るにより、夫を  
 貴むは是皆女の孝行の道  
 也。仁義礼智信の五常い  
 づれも人の行へき

道なれ共、取分守るべき  
 は仁の道也。されば幼時  
 よりやさしき友に交り、  
 仮初にも猥がはし



○祐子内親王の紀伊  
 祐子内親王は後朱雀院の第四の皇女にして、母は中宮祐子敦兼親王の娘なり。第四の宮なれども、きさき腹の娘なれば、一の宮といふにや。金葉集堀川艶書合等には一ノ宮紀伊とあり。此宮は後三条院の御兄弟なり。紀伊守重経が妻女となりたる故に、名付て紀伊といふ。



わくよゆ  
 たりの浪の  
 かけしや袖の  
 あはれ

○わきかは石ろくせふ三分はらや一分をばよくすりませ、随分よき酢をせんじかへし、その酢にてねりてぬるべし。五六度もぬればなをるなり。ただしならろくせふはあしく、糸の具につかふ上々吉の石緑青はよし。または(生)姜(姜)のしぼりじるもよし。ふだん(胡)粉(粉)ごふんをぬるもよし。

この故に家をよくたもつ女は、正ことを好、家を猥にする女は、えならずあやしきを好よし、人々申

○祐子内親王家の紀伊  
 祐子内親王は後朱雀院の第四の皇女にして、母は中宮祐子敦兼親王の娘なり。第四の宮なれども、きさき腹の娘なれば、一の宮といふにや。金葉集堀川艶書合等には一ノ宮紀伊とあり。此宮は後三条院の御兄弟なり。紀伊守重経が妻女となりたる故に、名付て紀伊といふ。

此歌は金葉集より出る所の五首の内なり。  
 明和三年迄凡八百七十六年になる

金葉集 第八恋下  
 おとに聞たかしの浜のあだ浪は かけしや袖のぬれもこそすれ



鶯蛙歌読シ事

傳也。ひごろ心に懸悪を

鳥あまたある中にも、鶯は和国の風俗  
 にかなひ、歌をよみしためしあり。  
 かうにん天皇の御時に、大和の国高天  
 の寺の梅に、一つの鶯来りてうたをさ  
 へづるに、鳥飛し木下かげに、蛙の足  
 形に歌あり。

恥、善にす、むは身を治  
 る志也。女は家のうちを  
 守るとなれば、先其身の

初春の朝毎には来れども

あはでぞかへるもとの住家に

是鶯のよみし歌なり。

住吉のあまのみるめにあらねども

かりにも人にとわれぬるかな

是はかわづのよみし歌なり。人間に歌

読ぬは虫鳥におとりし也。

行儀作法正しくして、家  
 内の者化して和ぎ、一族  
 のしたしむは正しき行な  
 るに、我身の



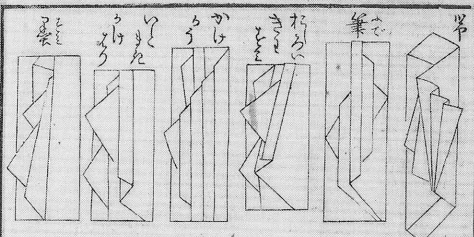
鶯蛙の歌讀事  
 鳥あまたある中にも、鶯は和国の風俗  
 にかなひ、歌をよみしためしあり。  
 かうにん天皇の御時に、大和の国高天  
 の寺の梅に、一つの鶯来りてうたをさ  
 へづるに、鳥飛し木下かげに、蛙の足  
 形に歌あり。

鶯は和国の風俗  
 にかなひ、歌をよみしためしあり。  
 かうにん天皇の御時に、大和の国高天  
 の寺の梅に、一つの鶯来りてうたをさ  
 へづるに、鳥飛し木下かげに、蛙の足  
 形に歌あり。

鶯は和国の風俗  
 にかなひ、歌をよみしためしあり。  
 かうにん天皇の御時に、大和の国高天  
 の寺の梅に、一つの鶯来りてうたをさ  
 へづるに、鳥飛し木下かげに、蛙の足  
 形に歌あり。







師を勤ま  
 動る身を流  
 せと習しふも有  
 人希や女はいく

待賢門院堀川  
 たいけんもんいんは春宮太夫大納言公実の  
 白河院の御猶子として  
 鳥羽院の後にて、崇徳院後白河院の二  
 代ともに御母宮なり。堀川は村上の皇  
 子具平親王末やう、六条の右府顯房の  
 まこ、神祇伯頭仲の娘なり。



御印

筆

おしろいきわすみ

かけかう

いとまきかけはり

墨

○待賢門院堀川

たいけんもんいんは春宮太夫大納言公実の

娘にて侍しが、白河院の御猶子として

鳥羽院の後にて、崇徳院後白河院の二

代ともに御母宮なり。堀川は村上の皇

子具平親王末やう、六条の右府顯房の

まこ、神祇伯頭仲の娘なり。

貫之の歌に

あさなくけづれるつもる落髪の

みだれて物を思ふころかな

とあり。

此歌小倉山色紙の撰に千載集より

ぶ十三首の内なり。

明和三年迄凡六百五十六年に成。

皇嘉門院別當

千載集 第十三恋歌三  
難波江のあしのかりねの  
一夜ゆへ 身をつくして  
や恋わたるべき

法性寺関白忠道公の娘なりけるが、崇徳院の后にして、文安六年二月廿七日に院号を付給ふ。是近衛院の御准母也。別當は大皇太后宮すけ俊隆娘なり。別當とは皇嘉門院の要用の吏等、諸事何事にても物吏をつかさどる職の役女なり。千載集の詞書に、摂政殿の歌合に、旅宿に逢恋といへる心をよめると有。  
此歌は千載集より出る十三首の内也。  
同年迄凡六百三十六年になる。

結納荷物請取吏

程なくて他家に行、夫に従ひ、舅姑につかふまつべき事なれば、親の元にとどまるは暫のうち也。

- 目録
- 一 真綿 五把
  - 一 巻絹 何卷
  - 一 御酒 何樽
  - 一 帯代 何枚
  - 一 御肴 何種
  - 以上
  - 何某殿
  - 月日 何某

結納荷物受取の式は委敷は画本双葉種に見ゆる。ここに畧す。

右の品に受取を使者取次にこひける時は、此目録のうらへ受納をくわしく認べし。又荷物目録はしうとより婿へつかわすゆへに、

○皇嘉門院別當  
法性寺関白忠道公の娘なりけるが、崇徳院の后にして、文安六年二月廿七日に院号を付給ふ。是近衛院の御准母也。別當は大皇太后宮すけ俊隆娘なり。別當とは皇嘉門院の要用の吏等、諸事何事にても物吏をつかさどる職の役女なり。千載集の詞書に、摂政殿の歌合に、旅宿に逢恋といへる心をよめると有。  
此歌は千載集より出る十三首の内也。  
同年迄凡六百三十六年になる。



結納荷物請取吏

- 目録
- 一 真綿 五把
  - 一 巻絹 何卷
  - 一 御酒 何樽
  - 一 帯代 何枚
  - 一 御肴 何種
  - 以上
  - 何某殿
  - 月日 何某

右の品に受取を使者取次にこひける時は、此目録のうらへ受納をくわしく認べし。又荷物目録はしうとより婿へつかわすゆへに、

結納荷物請取吏  
目録  
一 真綿 五把  
一 巻絹 何卷  
一 御酒 何樽  
一 帯代 何枚  
一 御肴 何種  
以上  
何某殿  
月日 何某





女高くともいやしくとも、和歌の心がけを  
 第一にする時は、悪きみちにもまよわず。  
 世の中のあしきよきとわかれる事なれ  
 ば、まづ歌を読ならひたまふときは、目  
 に見へぬ鬼神をもやわらげ、とけかぬる  
 夫婦中もむつまじくなるなり。その歌を  
 こころがけ玉はんならば、まづ歌の文を  
 見たまふべし。別其歌書の外題をここに  
 するす。女子のひまには心がけ給ふべし。

朝の夜にけり  
 なく花もさし  
 りふさもあま  
 小は味もさし  
 見らふ下つ

女高くともいやしくとも、和歌の心がけを  
 第一にする時は、悪きみちにもまよわず。  
 世の中のあしきよきとわかれる事なれ  
 ば、まづ歌を読ならひたまふときは、目  
 に見へぬ鬼神をもやわらげ、とけかぬる  
 夫婦中もむつまじくなるなり。その歌を  
 こころがけ玉はんならば、まづ歌の文を  
 見たまふべし。別其歌書の外題をここに  
 するす。女子のひまには心がけ給ふべし。

一人一首  
 一新百人一首  
 一三十六歌仙  
 一女歌仙  
 一新女歌仙  
 一伊勢物語  
 一源氏物語  
 一栄花物語  
 一枕草紙  
 一うつぼ物語  
 一竹取物語  
 一はちかづき

歌道女心得文

女高くともいやしくとも、和歌の心がけを  
 第一にする時は、悪きみちにもまよわず。  
 世の中のあしきよきとわかれる事なれ  
 ば、まづ歌を読ならひたまふときは、目  
 に見へぬ鬼神をもやわらげ、とけかぬる  
 夫婦中もむつまじくなるなり。その歌を  
 こころがけ玉はんならば、まづ歌の文を  
 見たまふべし。別其歌書の外題をここに  
 するす。女子のひまには心がけ給ふべし。

歌書目録

- 一人一首
- 一新百人一首
- 一三十六歌仙
- 一女歌仙
- 一新女歌仙
- 一伊勢物語
- 一源氏物語
- 一栄花物語
- 一枕草紙
- 一うつぼ物語
- 一竹取物語
- 一はちかづき

嘲なし。猥にはしたなく  
 拙ければ、富といふとも、  
 志有人には疎れ、はづか  
 しめらるべし。惣而

人の善悪を知給ふべきに  
 は、其人の愛る友を見て  
 知べし。我に勝る友を好  
 己に劣る友を不好

- 一宇治拾遺
- 一太極和俗
- 一古今集
- 一後選集
- 一拾遺集
- 一後拾遺集
- 一金葉集
- 一詞花集
- 一千載集
- 一新古今集

右古今より合八品の歌書、是を八代集と  
 是代八代集より八品に  
 十二代集を加へて廿一代  
 集と名なれり。女重法とす。

は貞女も垣  
 六もく人  
 可成道友を  
 せつら事ふ  
 女重法とす

○式子内親王  
 後白河院第三の皇女、母君從三位成子大  
 納言季成卿の娘なり。大炊御門の齋院  
 又萱齋院とも申奉り、此内親王は女房  
 にはすぐれてきつて侍る。さまざま此の  
 思ひいられたる歌をば、かの有家、雅経、  
 道興、家隆も読ぬきがたくや侍らんと  
 いふ。新古今集に此歌の詞書に、百首の歌  
 の中に思ふ恋の心しをとなり。小倉色紙  
 に有。新古今集より出る十五首の内なり。  
 明和三年迄凡五百九十六年なる。



- 一宇治拾遺
- 一大和物語
- 一古今集
- 一後選集
- 一拾遺集
- 一後拾遺集
- 一金葉集
- 一詞花集
- 一千載集
- 一新古今集

は、貞女の志也。但かく  
 いへばとて、人を撰べか  
 らず。是は悪友を近づ  
 くる事なかれと云也。貴賤  
 に不限、衆

○式子内親王  
 後白河院第三の皇女、母君從三位成子大  
 納言季成卿の娘なり。大炊御門の齋院  
 又萱齋院とも申奉り、此内親王は女房  
 にはすぐれてきつて侍る。さまざま此の  
 思ひいられたる歌をば、かの有家、雅経、  
 道興、家隆も読ぬきがたくや侍らんと  
 いふ。新古今集に此歌の詞書に、百首の歌  
 の中に思ふ恋の心しをとなり。小倉色紙  
 に有。新古今集より出る十五首の内なり。  
 明和三年迄凡五百九十六年なる。

新古今集 第十一恋歌一  
 玉の緒よたへなばたへよ  
 ながらへば しのおぶるこ  
 とのよほりもぞする





袿の夜忌言  
 さる のく  
 ろんれ ろんれ  
 きんみ うんれ  
 あいん あく  
 きんみ めんれ  
 せんに及ぬ うんれ  
 死ぬる めんれ  
 女髪結様之名  
 小嶋田 吹わけ 大嶋田  
 片兵庫 角わけ 兵庫  
 吉野 籠嶋田 丸わけ  
 紅葉 はりもどき 釣ふね  
 つぶわけ くしまき かせわけ

生かすひとと  
 好むれんと  
 車大さ日月に  
 草木を照らす  
 淵水の流にこそ

生かすひとと  
 好むれんと  
 車大さ日月に  
 草木を照らす  
 淵水の流にこそ

祝言の夜忌言

さる のく  
 わかれ はなれ  
 きる うすひ  
 あさい あく  
 かへす もどす  
 きらふ めんない  
 ぜひに及ぬ かなしき  
 死ぬる 死んだ断

女髪結様の名  
 かうがい かたかうがい 大嶋田  
 小嶋田 吹わけ 兵庫  
 片兵庫 角わけ 丸わけ  
 吉野 籠嶋田 釣ふね  
 紅葉 はりもどき 大吉  
 つぶわけ くしまき かせわけ

とも疎み音信なき時は、  
 我行ひ正しからずと知べし。  
 只浮世中に、清も濁も心の淵の水の流にこそ

とおもひ廻すべし。数多  
 の人を召仕事、大かた  
 日月の草木を照し給ふごとくに、  
 昼夜慈悲





此一巻は昔より我が家に板行有て、羅山の君子林氏道春先生は書林の権者として予古人に所望して永く桜木に遺し比類焼して其板の存を以て女今川本文集を代長友松軒の筆跡と北尾雪抗斎の画工み貴により、予急なれども、人々の教にも成べきかと桜木に再寿而已。

右女今川一帖者依  
書肆正徳堂  
丁亥孟春  
青蓮院宮御門人  
玄海堂書



六歌仙人像

伊勢物語教訓文二 女筆初瀬川三  
花王いせ物語絵抄全 国尽名所玉章全  
女今川教全文 女尺統艶文箱全  
文筆百人九重錦全  
風流源氏双六全 女尺統艶文箱全  
風流艶双六全 女筆百人九重錦全  
明和  
いつつのとし  
やよひ  
目出度日

大坂心齋橋南二丁目角  
御書物所 洪川彦太郎

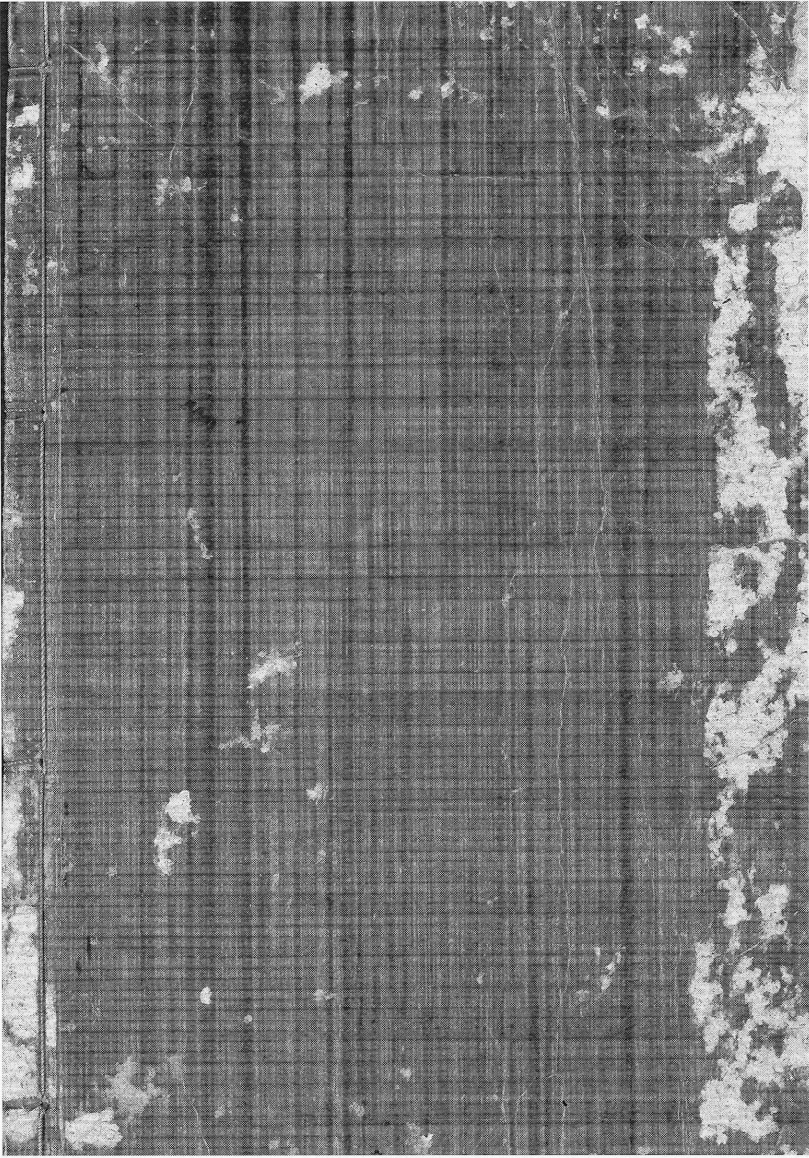
此一巻は昔より我家に板行有て、羅山の君子林氏道春先生の書捨玉ひし反古なりしを、予古人に所望して永く桜木に寿しに、遺し比類焼して、其板行名のみ残りて、女今川本文なるに、近代長友松軒の筆跡と北尾雪抗斎の画工み貴により、予急なれども、人々の教にも成べきかと桜木に再寿而已。

目出度日

六歌仙人像  
伊勢物語教訓文二  
花王いせ物語絵抄全  
伊勢物語女訓大全全  
風流源氏双六全  
風流艶双六全  
明和  
いつつのとし  
やよひ  
目出度日

女筆初瀬川三  
国尽名所玉章全  
女今川教全文  
女尺統艶文箱全  
文筆百人九重錦全

大坂心齋橋南二丁目角  
御書物所 洪川彦太郎



裏表紙

